

月例のS-KYT訓練の実施について

愛知県新城市消防団
団長 佐宗 龍俊

1 はじめに

新城市は、平成 17 年 10 月 1 日に、新城市、鳳来町及び作手村の旧 3 市町村新設合併によって発足しました。

愛知県のいわゆる東三河と呼ばれる地域の中にあり、東は静岡県浜松市に接しています。人口は約 5 万で、面積は県内 2 番目となる 499 平方キロメートルを有していますが、その 80 パーセント余りは山林となる中山間地のまちです。

そのため、豊かな自然に恵まれた観光地を有し、清流豊川沿いに広がる桜の名所「桜淵公園」や、霊鳥仏法僧（コノハズク）の鳴き声が聞こえ、国の名勝にも指定されている「鳳来寺山」とその山麓に湧く湯谷温泉、そしてササユリなど貴重な植物の宝庫である「作手高原」など、市域には国定公園・県立公園の指定区域が広がり、美しい景観が点在し訪れる人を魅了しています。このほか、里芋・茶・梅やトマトなどの高原野菜といった風土を活かして算出される農作物や、春の桜祭りと古城祭り・三河手筒花火も奉納される夏の花火大会・秋のもみじ祭りなど、四季折々のイベントも盛りだくさんにあります。さらには、有名な長篠・設楽原の決戦地が中心部に広がり、そのゆかりの史跡も点在するといった歴史のまちでもあります。さらに、中心市街地においては、かつて古くから三河の要衝豊橋と南信州の小京都飯田を結ぶ街道（現一般国道 151 号）の大きな宿場を擁し、山湊馬浪（さんそうばろう）というにぎわいを呈していたことから、現在市としては、その活況を現代に取り戻すべく、それらの人を含めた地域資源を活用し、「山の湊の創造都市」と銘打って地域振興に邁進しています。



2 新城市消防団の概要

新城市消防団は、平成 17 年の合併により、一旦旧 3 市町村の消防団の多団制で 3 本団、3 ラッパ隊、15 分団・63 班で団員定数 1,138 名により発足しましたが、平成 20 年 4 月に至り統合 1 団制を敷き、新たな編成によって 6 方面隊、15 分団・48 班で団員定数 980 名として再スタートしました。

現在は、再編成により 14 分団・43 班に変更されていますが、平均年齢 33 歳と比較的若い団員が多く、地域支援団員の確保も含めて、地域の安全安心のため日々努力を重ね、消防操法にも熱心に取り組み、平成 19 年度の県消防操法大会では、小型ポンプ操法の部において優勝を果たしています。

3 S-KYT 訓練を月例で実施する経緯

新城市消防団では、毎年 4 月当初に新入団員、班長・部長等を対象に訓練会（研修会）を実施し、その中で従前から安全管理の周知徹底を図ってきました。しかしながら、公務災害の発生件数を減少させることはできず、特に操法訓練においての

ケガは毎年発生し、過半数を占める状況となっていました。このため、団幹部と事務局では、会議等の団員参集機会を捉えて事故防止に努めるよう指導は行ってきましたが、状況打開には至っていませんでした。

そこで、あらためて次年度の幹部（班長以上）が決まり、各団の新体制に向けての準備が始まる2月中旬に、安全管理に関する研修を実施することとしました。しかし、安全管理に集約しての研修は初めてとなり、そのノウハウも不足している面もあったので、公務災害防止に精通した専門家を招き、充実した内容での研修を開催すべきとなり、消防基金の消防団員公務災害防止研修会事業を申請したところ、決定を受けましたので、S-KYT研修を開催するに至りました。

この消防基金研修は全団員が同時に受講するという事は困難であり、学んだことを幹部が団員へどう周知徹底していくかが肝心な部分であると考える中、毎月19日に実施される防火啓蒙活動の機会を利用し、全団一丸となって各詰め所で消防活動危険予知訓練を実施し、訓練内容を3か月ごとに報告し、分団長→方面隊長→団長が確認と指導をするという取り組みを始めました。基本的には、各班長が班員へ研修内容をフィードバックし、防火パトロールの前にタッチ・アンド・コールを始めに、危険予知訓練、作業指差し呼称といったことを繰り返し実践しています。



詰め所内でイラストシートを使っての危険要因の分析

4 取り組みの成果と今後について

S-KYT研修による毎月定例の危険予知訓練は、導入から5か年を経て、本年度で6年目を迎えます。この訓練を開始した後平成22年度から現在のところ、公務災害は発生していません。そういった意味では、毎月定例の訓練は災害防止に対する成果に結びついているといえます。

よくある話として、こうした状況が続くと一方で、ときどき団員からは「いつまでS-KYT活動が続けるのですか？ もうそろそろやめてもいいんじゃないですか？」というようなことを聞かれることもあります。そのときには、「団員全員が、すべての消防団活動の中で、常に危険を予知し、安全に作業を行うにはどうすればよいのかを考え、仲間の団員に気軽に的確に助言し合えることが定着すれば、あえて行わなくてもいいとは思いう。」と伝えています。S-KYT研修を受講した団幹部からは、危険予知と災害防止にはなぜこの訓練が必要なのかを団員に理解させ、反復訓練を実践すること以外に近道はない。そのためにたいへん有意義な研修であり、自らの学びの場でもあると考え、毎回真剣に取り組んでもらっています。そうした意識が団全体に浸透するよう、幹部諸君に引き続き励んでもらいたいと思っています。そして、今後も地域住民の安全安心を確保する任務を全うすることができるよう、ケガ・事故ゼロの団活動を維持すべく、安全管理の徹底に努めていきます。



指差し呼称の様子